機友会ニュース

機友会と母校のさらなる発展を祈念して

立命館大学機友会会長　島田泰男

機友会会員の皆様には、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

平素は本会の諸活動に関し、何かとご支援を賜わりまして、誠に有り難く厚くお礼申し上げます。

さて、母校・立命館大学では昨年四月、新キャンパスへの理工学部拠点移転および衣笠跡地への新学部「政策科学部」設置を中軸とする第四次長期計画が成功裡に推進され、来年四月にはさらに理工学部に「ロボティクス学科」と「光工学科」なる二つの新学科が設置され、十学科からなる一大理工学部が実現する見通しとなりました。また、産学交流の面でもいくつかの研究センターや「シンクロトロン放射光（SR）発生・解析施設」の建設など、他に例を見ない独自の大型企画が次々に実現し、目前に迫った二十一世紀への大きな飛躍が確信されています。

機械工学科の退職でもあられます大南正瑛総長の卓抜したリーダーシップのもとに、こうした大型企画が成功裡に推進され、社会的評価も著しい高まりをみせている母校の躍進と新たな挑戦に対して、卒業生の一人として大変心強く存じます。また、卒業生の一人一人と母校とのきずなが、最近、一段と太くなっており、校友と母校との連帯感が大きく膨らんで参りました点も、ともに喜び合い、ともに感謝したい趨勢であります。

以上のような情景の中で、立命館大学機友会では現在、卒業生相互の親睦ならびに卒業生と母校の相互支援体制の強化をはかるため、全国規模での支部組織を結成する取り組みが進んでおり、会員各位および諸先輩をはじめ機械工学科教員各位の献身的なご支援により、平成四年九月六日に第一号の支部として「滋賀支部」が設立され、続いて同月十九日には「北陸信越支部」が発足致しました。引き続き十月二日には「京都支部」、十一月二十八日には「大阪支部」が設立され、平成五年七月二十五日には「東海支部」が、平成六年三月二十七日には「兵庫支部」が発足するとともに、本年四月十六日には第七番目の支部として、「奈良和歌山支部」が設立され、さらに現在、「関東支部」の設立準備が推進致しております。

全国を十三ブロックに分割した支部組織結成計画も、いま第七番目の「奈良和歌山支部」の発足を迎え、まさに過半数の支部が確立されたことになります。また、本会は会員総数七〇〇〇名にのぼる大組織に成長して参りましたが、上記七支部の会員合計数はほぼ四〇〇〇名に達し、会員総数の面からみても文字どおり過半数の支部組織が実現したことになります。各支部設立準備委員の方々をはじめ会員各位の絶大なるご支援に対して、ここに改めて心より厚くお礼を申し上げる次第でございます。

これまでの支部組織結成に関する種々の取り組みの中で、全国各地の機友会会員同士間で新たな交流が生まれたり、幅広い情報交換が行われまして、それぞれの年代の卒業生各位が順風や逆境のなかで逞しく人生を切り拓き、驚くほど広範な業種・職域で元気にご活躍されている状況を目のあたりにみて、大変頼もしく存じました。折しも本会企画事業部会のご尽力により機関誌「機友会ニュース」が創刊される運びとなり、本誌が会員相互間、さらに本部支部間等の広範な会員相互のコミュニケーションの情報源となることを念願致します。

最後に、機友会と母校のさらなる発展を祈念して、今後も引き続き会員各位の温かいご支援とご鞭撻を賜りますよう、宜しくお願い申し上げますとともに、皆様方の益々のご健勝とご隆盛を衷心よりお祈り申し上げます。

立命館大学の長期計画と世界への新たな挑戦

立命館総長・学長　大南正瑛

機友会の皆様には、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

本学が校友十九万人を擁する中、貴会はすでに会員総数七〇〇〇名を数える大規模な校友組織に成長され、各年代層の卒業生各位が広範な分野で逞しくご活躍されております。本学の代表者といたしまして、また、機友会会員の一人として誠に喜ばしい限りでございます。

このたびの貴会機関誌「機友会ニュース」の創刊にあたり、立命館学園の長期計画と二十一世紀にむけた新たな挑戦に関する最近の動向についてご紹介させていただき、皆様に一層のご支援とご鞭撻をお願い致したく存じます。

皆様ご承知の通り、「びわこ・くさつキャンパス（BKC）」への理工学部の拡充移転、衣笠キャンパスへの新学部「政策科学部」の設置を中軸とする第四次長期計画は、校友の皆様をはじめ関係各位の広範なご支援により、ほぼ完璧の運びとなりました。また来春には、理工学部にさらに二つの新学科「ロボティクス学科」および「光工学科」が設置される予定であります。

さらに大学院につきましても理工学研究科のみで一学年定員五〇〇名という抜本的再編拡充がすでに実現しており、学館四〇〇〇名・大学院一〇〇〇名からなる日本でも屈指の一大総合理工学部が完成されつつあります。

以上の経過のなかで、本学はいま、二十一世紀における立命館学園の将来像を大胆に明らかにし着実に具体化すべく、第五次長期計画の策定に取り組んでおります。その柱は、一つには、社会・人文系分野の教学システム・条件の抜本的な高度化を目指した、一九九八年からの経済・経営専門学部のBKCへの新展開です。このことにより、専門学部の教育・研究条件を高度化するとともに、衣笠・BKCという二大キャンパスによる新たな魅力あふれる総合大学を構築いたします。

もう一つの柱は、この九月に新聞・テレビを通じて発表いたしましたが、大分県および別府市の協力により、平成十一年度（一九九九年度）に新たなに「立命館アジア太平洋大学」（仮称）を別府市に創設することです。新大学は、教育・研究・管理運営のあらゆる分野において、最先端の取り組みに挑戦し、日本の高等教育における先導

的なモデルとなることを目指しています。現在のところ「アジア太平洋学部」（仮称）と「国際マネジメント学部」（仮称）の二学部を構想しており、各学部入学定員四〇〇名、総収容定員三二〇〇名、うち約五〇％を留学生とし、教員構成も二〇～四〇％を外国人とする日本では先例のない国際的な大学を指向することとしております。この大事業を立命館学園創立百周年記念事業の中心に位置づけて、全学の力を結集した取り組みを進めてまいります。この間、大分県や別府市の絶大なるご支援をえてまいりましたが、今後さらにアジア太平洋地域の多くの国々、文部省をはじめ関係省庁、産業界、そしてなによりも校友の皆様など、幅広い関係各位に深いご理解とご支援をお願いせざるをえません。機友会員の皆様におかれましてもこのような母校の新たな挑戦と飛躍に対し、引き続き温かいご支援を賜りますよう何卒宜しくお願い申し上げます。

最後になりましたが、皆様の益々のご健勝と一層のご隆盛を心よりお祈り申し上げますとともに貴会のさらなる発展をお祈り致します。

理工学部の拡充と新たな飛躍に向けて

理工学部長　得丸英勝

機友会会員の皆様には、つつがなくお過ごしのことと謹察致します。

貴会機関誌「機友会ニュース」の創刊にあたり、理工学部を代表してご挨拶を兼ね、本学理工学部の最近の動向と将来展望について、概略をご紹介させて頂きます。

理工学部が昨年四月にびわこ・くさつキャンパスに拡充移転致しましたことは、皆様すでにご存知のとおりでありますが、皆様方はじめ多方面のご支援のお蔭で、その折に「生物工学科」、「情報学科」、「環境システム工学科」、「ロボティクス学科」、「光工学科」なる二つの新学科を設置することができました。また、大学院の大幅拡充にも成功し、理工学研究科だけで一学年の定員五〇〇名にのぼる大規模大学院が実現致しました。

こうして、新キャンパスに移転したばかりですが、本学部では当初の計画にしたがって、来年四月にはさらに「ロボティクス学科」、「光工学科」なる二つの新学科を設置する運びになっており、現在、全国的規模で受験生に対する広報活動が展開されています。すなわち、理工学部はその時点で「数学物理学科」、「化学科」、「生物工学科」、「電気電子工学科」、「光工学科」、「機械工学科」、「ロボティクス学科」、「土木工学科」、「環境システム工学科」、「情報学科」なる十学科構成となるわけであります。

したがって、新学科の学生が全学年入学し、拡充された大学院に定員の院生を迎え入れると、学部だけで五二四〇名、さらに大学院の一二二五名を合わせると実に六四六五名の学生・院生を擁する一大総合理工学部が誕生することになります。学部規模において私立大学で全国第五位、私立大学院規模では慶應義塾大学を抜いて早稲田大学に次ぐ全国第二位の位置を占めることになり、社会的使命や貢献度もこれに応じて大きく飛躍することが確信されます。

学部・大学院生数の拡大とともに、教員数も大幅に増員され、二十一世紀を視野に入れた先端科学分野を積極的に取り入れた新しい教育研究体制が整備されました。また、産業界・官公庁とも緊密な連帯をとりつつ、広範な分野にわたる産官学共同研究も大きな前進をみせており、我国の大学としては初めて本学に設置されるSR放射光発生・利用施設（オーロラ）はすでに建物も完成し、現在、SR本体の搬入・組立が順調に進捗しております。来年四月には本格稼働に入る計画であり、産業界さらに学界から熱い期待がよせられています。この他にも「ロボティクス・FA研究センター」、「材料・生産技術研究センター」、「エコ・テクノロジー研究センター」、「電子技術研究センター」等の多くの研究センターが設立され、産・官・学の広範な研究者集団を構成して、大規模な共同研究が推進されています。

機友会の会員各位におかれましても、母校のこのような新しい企画と挑戦に積極的に参加され、校友と母校との相互支援体制をますます強固なものに育て上げて頂きたく存じます。今後とも種々ご支援とご鞭撻を賜りますよう、この場をお借りしてどうぞ宜しくお願い申し上げます。

それでは、皆様の今後ますますのご健勝とご発展をお祈り致しております。

機械工学科の飛翔

機械システム学系長　田中武司

機友会会員の皆様方には益々ご壮健にてあられることと心よりお慶び申し上げます。理工学部が去年移転いたしましてから、約一年と半ばが過ぎ、ようやく落ちつきが見られる様になりました。この間におけるキャンパスの現況や機械工学科の取り組みなどにつき、概略ご報告申し上げます。

夏から秋にかけ、朝方は暑くもなく、寒くもなく、心地よい季節が続きますが、正門を入ると、広々としたキャンパスが目の前に広がり、朝の解放感がいっぱいに広がってくる。右手に四〇〇mトラックを備えたクインススタジアムがオープンな雰囲気を醸し出し、車が進むにつれ、二つの棟が視野に入ってくる。その手前に山小屋風レストハウスが現在建築中で、さらにメディアセンターが続き、コアステーションのあと、ユニオンスクエアーが目に入る。やや遠くにプリズムハウスやフォレストハウスが垣間見え、また、BKCジムが遠望できる。朝早く出かけると広大な敷地に人影がなく、しんと静まり帰ったすがすがしい朝の空気の中、勉学、研究に勤しむ者に、この上ない環境を与えてくれる。理工学部の移転は、立命館大学の発展にとりかけがえのないものであり、立命館人の英断は賛美して余りあるものと思われる。

中央駐車場から機械工学科が所属しているイーストウィングまで約五分のショートトリップである。四、五階の棟センター部に構えているのは、正に工学の中心が機械に有りを象徴しているかのように思えるのは言い過ぎか。教員個人研究室は東西に位置している。東には自然林が望め、西にははるか眼下に琵琶湖が望める。大きな窓、豊かな緑、気のきく秘書は研究者の独創性をはぐくむ三大必須条件であり、とれとは言わぬが、この内二者はBKCにて初めて叶えられたものである。再度言おう。立命館大学の英断は立派である。

イーストウィング四、五階とエクセル3に陣取った機械工学科は一九九六年度から新たにロボティクス学科を加え、二学科体制の機械システム学系と飛翔する。応用ロボット工学、機械知能、ヒューマンインターフェース、ロボティクス演習、ロボティクス実習など目新しい専門教科を教授、研究しようとしている。一方、材料力学、熱力学、流体力学、機械力学の四力学に起因する機械本来の工学を、材料機能デザイン、環境・エネルギー、機械制御システム、精密・生産などの四つの系列に整理、改革し、新しい展開を図ろうとしている。二十一世紀の科学技術の展開にも十分耐え、対応できる機械システム学系を構築しようと鋭意検討、準備中である。あくまでも、人間味のある機械工学、血の通ったロボット工学、演歌のわかるメカトロニクス工学を追求したいと思ってるが、ご意見を賜れば幸いである。卒業する大学院生、学部生もこのような構想を理解する民主的研究者、技術者となり、機友会OBになってもらいたいと祈念している。

四、五階から見る西目が比叡山、愛宕山に沈んでいく様は言葉に言い尽くせない素晴らしい景色であり、飛行機雲が幾筋も見える風景は以前には見られない光景である。機械工学研究者・技術者の多大な貢献の証である。機械

工学科で為してきた研究・実験の結果が未来永劫続け続けることは有り得ないとしても、野口英世の「遠き落日」にならないよう、沈み行く西日を見て思うばかりである。巣立っていく卒業生が機友会OBとして、社会人として立派になられることを祈ってやまない。

新しい機械システム学系並びに在学する院生、学部生に対し、暖かいご支援をお願いする次第です。皆様方の益々のご健勝とご隆盛を衷心よりお祈り申し上げます。

支部だより

立命館大学機友会兵庫支部

庶務幹事　西澤寛治

本年一月十七日に突如として阪神・淡路大震災に見舞われ、東日本と西日本を結ぶ物流の大動脈と企業の情報網を寸断され、日本の経済活動はマヒしました。

兵庫支部においては、会員の大半が、この地域に住んでいたこともあって、多くの会員が被災しました。その際に、機友会本部と各支部から心温まるお見舞いをいただき、どれだけ勇気づけられたかわかりません。機友会本部役員の方々と各支部の会員の皆様に心からお礼を申し上げます。

被災した兵庫支部会員の多くは、各支部の皆様の温かい励まし、復興に向けて力強く立ちむかっていますので、ご安心ください。

兵庫支部は、東海支部に次いで、平成六年三月二十七日に設立されました。大雷鳥雄（オークラ輸送機株式会社社長、昭和二十四年卒）を支部長として、役員十四名体制でスタートしました。

会員数は約六五〇名で、大半は兵庫県の南部に集中していますが、北部の日本海側、中部の山岳部、瀬戸内の淡路島にも数多くの会員が散在しています。

昨年度は、酒井教授の御熱心な御指導をいただき、数回にわたる兵庫支部設立準備会を開催して、三月二十七日の設立総会にこぎつけました。設立後の主な活動は、定期的に役員会を開催して情報交流を積極的に行うとともに、平成六年八月に「兵庫支部だより」を発行、十一月には兵庫支部会員名簿を発刊して全会員に配布しました。十月二十九日には、びわこ・くさつキャンパスの見学会を開催し、見学後、そのまま会場を都ホテルに移し、全国校友大会に参加しました。

本年にはいって、大震災に遭遇し、会員の消息や被害状況の把握などで、支部長をはじめ、役員ともども大変な時期を過ごしてきましたが、ようやく落ちついてまいりました。

ここで、会員名簿の情報交換についての提案をしたいと思います。転勤、転職等で他府県に移動する情報を入手した場合は、その情報の詳細を転入支部と連絡しあって、おたがいに会員名簿の充実をはかっていきたいと考えます。

今後は、当支部の会員相互の親睦をさらに深め、機友会本部および各支部と連絡を密にして、びわこ・くさつキャンパスの発展につながるような「楽しく活動的な兵庫支部」を実現すべく頑張ります。そして、大南正瑛総長が提唱する二十一世紀を目指した立命館大学づくりに協力していく所存です。

今後とも会員の皆様のご支援を賜りたくお願いします。

楽しく力強い「びわこ機友会」をめざして

機友会滋賀支部支部長　山田元助

「機友会ニュース」の創刊おめでとうございます。ご祝詞にたえて滋賀支部について設立から現在までの概要を書かせて頂きます。

一、設立

滋賀県草津市に理工学部が拡充移転することになり、全国各地に機友会支部を設けるという方針にこたえて、平成四年九月六日、大津市内のホテルで設立総会を開催しました。

第一部で会則を可決、役員を選出し、第一号支部が誕生し、島田会長の祝辞を頂き、第二部で講演会を開催、機械工学科田中道七教授の「二十一世紀への展望＝びわこ・くさつキャンパスを語る」の平成六年四月に開設される新キャンパスの壮大な構想のお話に、地元滋賀県に住む私達は大きな夢と喜びを感じました。第三部の懇親会では、大南総長の祝辞や祝電の披露があり、当日出席者五十二名がそれぞれ自己紹介をし、和やかな雰囲気の中、友好と親睦の和を広め、滋賀支部の発足を祝福しあいました。

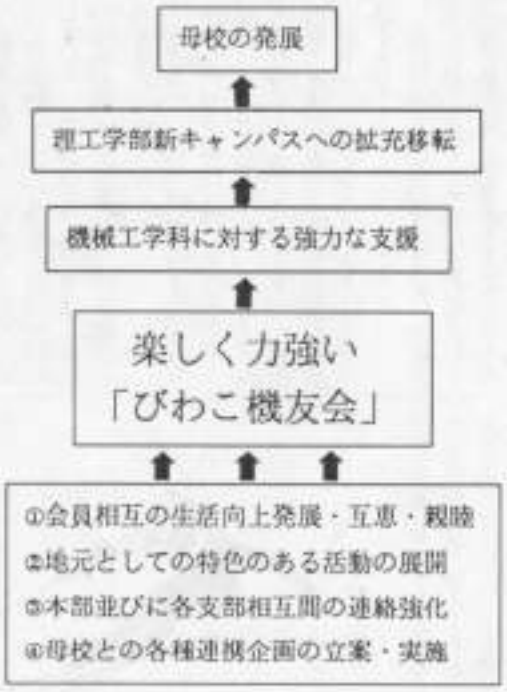
滋賀支部の愛称は「びわこ機友会」、その意図する所は機友会の一支部としての機能を尊重しつつ、独自の特色を発揮することが肝要であるとの趣旨から決定したもので、楽しく力強い「びわこ機友会」をうたうことにしました。

当日、準備委員会で周到に準備された会員名簿が出席者に配られましたが、名簿は地域別に分類し、卒業年度、勤務先を併記した便利なものです。（会員数は平成七年五月現在二八五名、目下最新版作成中）

二、活動方針と活動状況

当支部の活動方針は、図の通りで、「三人寄れば文殊の知恵」を原則に相談しあって、幹事会を中心に、臨時小委員会を開催しながら目標を達成する所において、一歩一歩前進することに努力中です。

具体的な活動として、



機友会滋賀支部と母校との力強い組織的連携

（一）財政基盤の確立、年会費納入会員、終身会費納入会員の増加促進運動展開

（二）びわこ機友会ニュース第一号発行（平成五年十月発行）。その内容は次の通りです。

①立命館目黒高等工科学校の記録

②びわこ・くさつキャンパス建設の歩み

③新進する滋賀県の全国ベスト5

ちょうどその頃、「表彰さよならの会」が東大に行われましたが、当ニュースは時宜を得たものだったと思います。①は当時の貴重な記録、写真が満載され、②は地元新聞記事を中心に、③は「びわこ銀行」の協力を得た、滋賀県の特性を全国の統計との対比において、明確にした貴重な資料です。

三、第二回総会

第一部の総会で島田会長から滋賀支部旗の贈呈があり、はからずも制定第一号の支部旗を頂きました。役員改選は設立当時の全員留任と一名増員が決定、第二部の講演会では、BKC建設途上発見された製鉄遺跡について、立命館大学文学部教授山尾幸久先生にお願いして、「木瓜原遺跡と古代国家について」の講演をして頂き、同時に地下収存遺跡と大学構内の見学会も開催しました。鉄は、機械と関係が深く、お話は全滋賀県下の製鉄遺跡におよびその他貴重な資料も頂き、興味深く有意義なものでした。

第三部の懇親会では、設立準備当時から多大のお世話を頂いている田中武司先生の他に、その後県下に転入された酒井達雄先生や山元茂先生をお迎えし、共に機友発展を願って美酒をくみかわしました。

四、本年度（平成七年四月～八年三月）の方針

（一）「びわこ機友会ニュース（第二号）」発行

（二）会員名簿の改訂

尚、終身会費納入会員は四十九名に達し、財政基盤も確立されつつあります。

五、「滋賀県下在住の機友会の皆様へのお願い」

びわこ機友会では会員名簿や県下の特色を反映した「ユニークな」「びわこ機友会ニュース」や貴重な資料を発行していますが、財政の都合上、終身会費や年会費納入会員が優先します。是非納入会員になって共に楽しんで頂くとともに、機友会滋賀支部旗の下、楽しく力強い「びわこ機友会」を目指して交流の和を広げたく、ご協力の程お願い申し上げます。

役員名簿

支部長　山田元助（昭和三十二年卒）

副支部長　石川勝司（昭和二十五年卒）

　　藤谷　勝（昭和二十六年卒）

　　北河　博（昭和二十七年卒）

庶務幹事　荒堀俊夫（昭和二十一年卒）

　　尾本　守（昭和三十三年卒）

　　上野哲夫（昭和三十八年卒）

会計幹事　青木一夫（昭和三十二年卒）

会計監査　石本与一郎（昭和三十二年卒）

　　武田幸三（昭和四十三年卒）

相談役　中山俊夫（昭和二十　年卒）

　　藤原俊英（昭和三十七年卒）

　　田中武司（昭和二十九年卒）

機友会奈良・和歌山支部発足

支部長　廣瀬全宏

平成七年四月十六日に新装になった「びわこ・くさつキャンパス」で大南正瑛立命館大学総長を始め、島田春男機友会会長、それに地元から滋賀支部長山田元助氏、機友会庶務幹事の酒井達雄教授を来賓として迎え、機友会「奈良・和歌山支部」の設立総会が開催され、全国で七番目の支部として誕生いたしました。

このたびの奈良・和歌山支部の設立につきましては、島田機友会会長、理工学部酒井教授には大変お世話になりました。最初の設立準備委員会が、平成六年十二月十八日に「びわこくさつキャンパス」で開かれ、島田会長より北は北海道から南は九州沖縄まで全国で十三支部の結成を目ざしているとお聞きしました。そして、今日まで地元滋賀支部を皮切りに、すでに六支部が誕生しており、今回の奈良・和歌山支部は兵庫支部に次いで近畿では最後の支部として発足することになるが、全国十三支部の中では七番目で、ちょうど過半数に達する、という島田会長の言葉が印象的でした。続いて、第二回目の準備委員会が平成七年二月二十六日に奈良工業高等専門学校の会議室で開催いたしましたが、ご多忙中にもかかわらず、酒井教授に遠方までご足労を煩わし、四月の設立総会に向けての綿密な打ち合わせを行いました。そして、前述のように、本年四月に会員数約二五〇名を有する機友会奈良・和歌山支部が発足し、島田会長より栄えある支部旗を頂りました。

また、設立総会では大南総長から「世界の立命館ベスト・ユニバシティを目指して」と題して記念講演をいただきました。昨年四月に理工学部が衣笠キャンパスから拡充移転し、現在の「びわこ・くさつキャンパス」となったのでありますが、そのすばらしい最新の機械設備と広大な敷地を目の当りにしたとき、まさに標題の如く「世界の立命館」という感を一層強くいたしました。この新キャンパスは立命館の輝かしい未来を象徴しているかのようでもあります。

ところで、今年は戦後五十年になりますが、今となっては、私たちが四十年前に学んだ衣笠キャンパスの木造校舎がなつかしく感じられます。その頃の校舎や実験実習用の機械設備と現在の新キャンパスとでは、まさに今昔の感があります。つくづくこのすばらしい環境で学ぶ現在の学生諸君は大変幸せだと思います。それに大南総長以下立派な教授陣の指導のもとに、年々その社会的評価が高まっておりますことは、我々卒業生にとりましても、無上の喜びであり待りであります。今後は、この恵まれた立派な環境から二十一世紀のわが国を担う有為な人材が多数輩出されるよう切望してやみません。

最後になりましたが、誕生間もない奈良・和歌山支部の我々に、全国の多くの機友会々員の皆様方から、暖かいご指導・激励を賜りますようお願い申し上げ、支部設立のご挨拶といたします。

和と輪を求めて
―北陸信越支部の活動―

支部長　角野豊春

福井県、石川県、富山県、新潟県、長野県の五県に在住する機友会会員相互の親睦を深め、活発な情報交換を通して会員の互恵と発展の場として、さらには母校との緊密な連携のもとに母校の発展に寄与することを目的として、北陸信越支部が誕生したのは平成四年九月十九日でした。本支部は機友会本部の絶大なるご支援の下、滋賀支部に次ぐ機友会第二番目の支部として設立されました。

北陸信越支部会員は現在一五〇名であり、会員数の最も少ない支部ですが、反面支部の占める面積は設立支部の中で最大であろうと思われます。従って、支部の運営には時間と距離といった問題の解決が重要な問題として存在していますが、様々な士夫と役員並びに会員各位のご理解とご支援により活発な各種事業が展開されてきています。

「機友会ニュース」の創刊に当たり、北陸信越支部の活動の概要（表を参照）を記載させて頂き、本支部会員の皆様への情報伝達と、機友会会員の皆様への支部紹介の場とさせて頂きます。

一、支部設立前史

平成四年七月十二日敦賀市内において支部設立の第一回打合せ会が開催され、以後数回の打合わせを経て、同年八月二十二日福井県芦原温泉（ホテル美松）で支部設立準備委員会が、各県代表の出席の下に開催されました。

北陸信越支部の活動概要

開催年月日	事業名称	開催場所	備考
平成4年8月22日～23日	支部設立準備委員会	福井県芦原温泉　国際ホテル	
平成4年9月19日	支部設立総会・祝賀会	富山県富山市名鉄トヤマホテル	記念講演「理工学部就充移転と学園の将来展望」田中道七教授
平成5年2月20日～21日	第1回役員会・新潟県会員懇談会	新潟県月岡温泉ホテル清風苑	支部の活動方針、支部会費徴収方法
平成5年6月19日～20日	第2回役員会・長野県会員懇談会	長野県松本市松本マウントホテル	本部定時総会へ向けての取組み方法
平成5年10月16日	第3回役員会・会員懇親会	京都市烏丸京都ホテル京都市都ホテル	母校への支援方法、特別会員の入会承認　全国校友大会に参加、「大野実佐子を応援する会」に入会
平成5年10月17日	衣笠キャンパスさよならツアー 機友会第14回定時総会	京都市	
平成6年1月29日	第1回特別会員懇談会	福井県福井市料亭丹厳道	
平成6年2月19日～20日	第4回役員会・石川県会員懇談会	石川県片山津温泉北陸グランドホテル	母校の寄付政策と支援方法
平成6年5月28日	第2回特別会員懇談会	富山県富山市古洞の森緑水亭	
平成6年6月4日～5日	第5回役員会・富山県会員懇談会	富山県宇奈月温泉ホテル延楽	母校への寄付に対する支部の取り組み方法
平成6年7月30日	第3回特別会員懇談会	福井県福井市福井ワシントンホテル	
平成6年9月17日	第2回支部総会・懇親会	福井県福井市福井ワシントンホテル	支部旗贈呈式、記念講演 「びわこ・くさつキャンパスの現状と将来構想」 酒井達雄教授　民謡歌手田中慎子嬢出演
平成7年7月8日	第4回特別会員懇談会	福井県福井市福井ワシントンホテル	
平成7年2月18日	第6回役員会・新潟県会員懇談会	新潟県新潟市万代シルバーホテル	母校の支援方法、支部行事について
平成7年7月8日	第4回特別会員懇談会	福井県福井市福井ワシントンホテル	

二、支部設立総会

平成四年九月十九日富山市内（名鉄トヤマホテル）において、機友会本部より島田泰男会長、大学側より田中道七、酒井達雄の両教授のご臨席の下に開催されました。この総会には校友会各県支部長にもご臨席を頂きました。なお、校友会各県支部長には本支部の参与として活動へのご支援とご協力を頂いています。設立総会祝賀会のアトラクションで得た収益金を母校への支部からの寄付金第一号として納付しました。

三、会員相互の親睦活動

支部会員の相互理解と情報交換は、枠を取り払った裸の付合いから始まるものであり、お互いに顔を合わせて近況を話し合うことが必要であるとの考えから、支部創設期の事業として会員の懇談会を開催しました。とは言っても支部が広範囲に広がり、全支部会員が一同に会することは困難なことから、役員会と併せて各県で順番に懇談会を開催してきました。各県における懇談会の準備は副支部長（各県に一名配置）と県担当幹事長にお願い致しました。開催日と開催地は表に示す通りであり、主要な講演を備考に記載しました。

約一カ年で各県を一巡し、現在その二巡目に入っております。それぞれの県では多くの会員が出席され、会員相互並びに役員との懇親を深めて参りました。同一の県内においても日頃は顔を合わせることの少ない会員同士が、学生時代を懐かしみ夜遅くまで懇談し、校歌や応援歌を学生時代にタイムスリップして肩を組み合って歌っているのが印象的でした。これらの役員会・懇談会には機友会本部より先生にご出席頂き、母校の現状に付いてのお話を頂き、本部と支部との緊密な連絡を取り合ってきました。

四、第二回支部総会

支部規約に則り、二年に一度の支部総会が平成六年九月十七日福井県福井市内（福井ワシントンホテル）で開催されました。総会に先立ち、島田泰男会長より支部旗の寄贈がありました。懇親会では民謡歌手・田中慎子嬢（当時、産業社会学部四回生）をお招きして「民謡の夕べ」が催され、安来節をはじめ美声をご披露いただきました。

五、特別会員制度

機友会会員による支部活動に加え、その活動を地域に密着させ理解を深めていくことも必要との考えから、当支部の会則には「特別会員」制度を設け、支部活動に協賛頂ける法人または個人を会員としてお迎えすることになっています。現在八名の特別会員（男性二名、女性五名）が入会しております。福井県六名、富山県一名、長野県一名であり、その中にはスペイン人女性（スペイン語講師）も在籍し国際交流にも一役かっています。これまでに特別会員の集いを四回開催し、親睦を深めると共に支部活動並びに母校の現状についての理解を得てきております。このような活動の中で、母校への寄付活動にも積極的に協力を頂き、多額の拠金を頂いておりますことは、誠に有り難く感謝の限りであります。

六、母校への支援活動と相互協力

支部活動の大きな目的の一つに母校への支援活動があります。この支部の方法は金銭の提供のみではなく、母校の情報を地域へ伝達することも大切なものと考えおり、前述の特別会員制度は母校支援に対して重要な役割を担っていると思います。当支部ではこれまでに理工学部（びわこ・くさつキャンパス）充実のための寄付活動に積極的に取り組み、支部会員に寄付のご提供を直接お願いし、支部で拠金を取りまとめ本部に納入して参りまして、これまでに二回の納入を行い、現在、当支部役員会で決定された目標金額に向けて更なるお願いをしている現状です。

また、平成九年十月支部会員懇親会の一環として参加した全国校友大会の折、民謡歌手「大野実佐子を応援する会」に当支部として入会して校友の活躍を陰ながら援助し、応援しております。

機友会活動の活性化のために当支部より本部に対していくつかの提言を申し上げて参りました。機友会バッチの作製と頒布、及び支部旗の作製をお願いし、本部のご理解の下に実現いたしました。支部の集いにはバッチの着用と支部旗の掲揚により連帯感の高揚に役立っております。

支部設立後二年を経過し、支部活動の益々の活性化に向けて、会員相互の和と輪の広がりを目指して、新たな企画の立案を図って参りたいと考えております。会員諸兄のご理解とご協力を切にお願いする次第であります。

研究室・同窓会

「杉本・笠井会」

近藤誠宏

今年（一九九五）三月十一日、早春のよく晴れた朝、杉本先生の訃報を受けた。つい一昨年先生の傘寿のお祝いとて、「杉本・笠井会」OBの面々が集まったときにもお元気なお姿を拝見

しており、その折には各卒業年度のOBが、学生の頃の先生との思い出などを次々と披露した話に一つ一つの場面を思い出されるかのように頷いていらしゃったのが印象深く残っています。また、今年の正月には例の先生の特徴のある字で書かれた年賀状に先生のお元気なお姿を想像できたのに残念でなりません。ご冥福をお祈り致します。

「杉本・笠井会」の始まりは古く、杉本先生が立命館に赴任された一九五四年（昭和二十九年）は、もちろん、現在、最年長のOBの方々が学生の頃から懇親会は開催されていました。昭和二十年代は、各卒業生年度毎に研究室のOBが集まっていたが、昭和四十年代に入ると、OBの各年度ごとの横の連絡もきることながら縦の連絡も密にしようと言うことで、また、先生にも卒業年度ごとに毎回ご出席願うよりまとめて面倒みてもらう方が、より楽しく話もはずむのではないかということでOB全体の集いとして計画されるようになりました。

「杉本・笠井会」には、特別な会則や固定した会員の定義など堅苦しいものはいっさいありません。機械工学科出身の関係者どなたでも参加OKです。杉本・笠井両先生を囲み、楽しい会合を催すことに賛同いただける人たちの集まりといえます。過去第一回から第六回はほぼ五年間隔で、何か節目になるときを記念して開催し、第七回からは二・三年間隔で開催してきています。その都度一〇〇～一五〇名のOBが集い大変な熱気と感動で湧いてまいりました。しかし、次回（第九回）からは残念なことに杉本先生はご出席になれませんが、生前から賑やかで楽しいことが好きな先生でしたから今回も盛大に「杉本先生をしのぶ会」を開きたいと思っています。学生時代、卒業後も、なにかと杉本・笠井両先生と関わりをお持ちになった方々もさぞ、多数の参加をお持ちしています。素晴らしい出会いが、旧交を温めることができると思います。

第一回
一九六二（昭和三十八）年十一月
五月雨の内燃機関研究室完成　松山園

第二回
一九六七（昭和四十二）年　某月
杉本研究室懇会　刈屋坊

第三回
一九七四（昭和四十九）年　六月
杉本先生の還暦の祝い　都ホテル

第四回
一九七九（昭和五十四）年　一月
杉本先生のご退職記念　新都ホテル

第五回
一九八四（昭和五十九）年十一月
杉本先生の古稀の祝い　からすま京都ホテル

第六回
一九八八（昭和六十三）年　六月
笠井先生のご退職記念　からすま京都ホテル

第七回
一九九〇（平成二）年　十一月
杉本先生の喜寿の祝い　京都東急ホテル

第八回
一九九三（平成五）年　三月
杉本先生の傘寿の祝い　アピカルイン京都

第九回
一九九五（平成七）年　十一月
杉本先生をしのぶ会　京都ホテル

今後もこの様なかたちで続く筈の「杉本・笠井会」を開催していきたいと考えております。

なお、本会についての連絡先は立命館大学機械工学科の山元先生（TEL〇七七五―六六―一一一一、FAX〇七七五―六六―一二六六五）までお願いします。

―藤谷・酒井研究室同窓会―「オアシス会について」

会長　小野健二（昭和三十年卒）

機友会の皆様お元気ですか。このたび「機友会ニュース」創刊を機会に、貴重な紙面をお借りして当会の活動状況を紹介させて頂くことになりました。

一九八〇年一月、藤谷研究室同窓の有志が皆様に呼びかけて藤谷先生の還暦祝賀パーティを開かせて頂いたのが、本会の始まりであります。それを第一回と考えますと昨年暮れには第七回の集まりを持ち、今年は発足十五年目に当たります。当初は藤谷研究室の仲間が集まって語り合う場としてスタートした訳ですが、熱心な会員諸氏のご協力を得て会を重ねる毎に内容も充実し、第三回の時には藤谷先生の後継者としての酒井先生のお名前を入れ、「藤谷・酒井研究室同窓会」となり、さらに一九八八年には同窓会々則が制定され、総会と講演会という名実共に充実した同窓会としての形が整ったようであります。

さて本会の詳細経過は後にゆずることとし、その愛称である「オアシス会」について少しお話ししておきたいと思います。一九九一年四月、酒井先生が教授に昇任されましたのを機会に、又新しい会員の中には「藤谷先生」のお名前、お人柄を全く知らない方々が次第に増えて来た事もあり、今後は酒井先生を中心にリフレッシュして行こうという事から関係者の間で繰り返し検討を重ねた結果、酒井先生の「井」は泉と同義語であり爽やかな清涼があって良いのではないか、又新しさをアピールするためには片仮名の方が良いのでは・・・等の意見から「泉」は「オアシス」という事になりますので前記の愛称に決定した訳であります。もともと本会は藤谷先生を父親のように思い自然発生的に「泉」のように湧き出て来たみんなの気持ちからスタートしたものであり、そういった初心も今後共旧交を温め、母校との交流をはかる「憩いの場オアシス」として育てて行きたいと思っております。

最後に本会の経過を紹介し今後共相変わらぬご支援をお願いすると共に、機友会の益々の発展をお祈りして終わりたいと思います。

第一回　一九八〇、一、二七
京都ホテルにて
藤谷研究室同窓会の発足を兼ねて
藤谷教授還暦祝賀記念パーティーを開催

第二回　一九八一、三、一五
中川会館にて
酒井先生歓迎会（英国ワーウィック大学における国際会議で研究発表のため）

第三回　一九八四、八、二六
末川記念会館にて
酒井先生歓迎会（英国バーミンガム大学における国際会議で研究発表のため）
講演「前回出席の国際会議を顧みて」

第四回　一九八八、九、四
末川記念会館にて
米国ワシントン州シアトル市のワシントン大学への一年間留学される酒井先生の歓送会を兼ね、初めて総会形式で開催
会則の確認、役員の承認
講演「立命館大学の近況と研究室の経緯」　酒井先生
「産業界の動向と一提案」三菱重工京都技術部主査　大金　晋

第五回　一九九〇、四、二一
末川記念会館にて
一、藤谷先生一周忌追悼の儀
記念映画「ありし日の藤谷先生をしのんで」
二、総会にて講演
「アメリカ留学を顧みて」酒井先生
「ユーシン精機と私」ユーシン精機社長　小谷　進（昭和四十二年卒）
三、同窓会だより　No.1発行

第六回　一九九四、一二、一〇
びわこ・くさつキャンパスコアステーションにて
一、総会特別講演「電気を奪る」
（株）井上電機製作所理事　小野健二
二、同窓会だより　No.3発行

草創期の思い出

二十二機会の五十一年
京都芸術家国保組合副理事長
小井　実（昭和二十二年卒）

名簿登載者一四五名

「二十二機会」は、昭和十九年四月に、立命館大学専門部工学科機械科（中川小十郎校長、本野亨工学科部長）に入学し、昭和二十二年三月に立命館専門学校工学科機械科（末川博総長、？工学科部長）を卒業した者九十

「入学五十年記念の集い」にて撮影

小出　実　青木義男　島田泰男　小橋　昇　酒井達雄　中島松義　田中武司　吉見陽文　大南正瑛　沼田敏彦　室野英一　小林正夫　中野堯介　山田元助　大橋清一　青木一夫　鈴木文枝　柳原　信

名のほかに、昭和二十年終戦後の転科転学者十名、中退者が四十二名、昭和二十二年三月卒業者が三名など、名簿登載者は一四五名である。

住所判明者七十名

昭和二十二年に工学科機械科を卒業したので、「二十二」と、期を機におきかえて、「二十二機会」と名付けた。

平成六年四月現在、住所判明者七十名、死亡者十七名、所在不明者五十八名である。

世話人は四名で、青木一夫（大津市在）、小井実（いさらい・みのる、京都市在、立命館校友会幹事）、島田泰男（京都市在、現機友会会長）、山田元助（草津市在、機友会総務委員長）である。

戦中戦後の三年間

在学中（昭和十九年四月～昭和二十二年三月）のことは、山田元助君が、「立命館大学理工学部六十五年小史」（一九八〇年三月二十五日発行）に国家の激動期を共に歩んだ学生時代と題して、農村・飛行場・工場・終戦後と四編にわけて記述してくれている。

また、藤谷先生御退職記念文集「立命館の風雪」（昭和六十一年六月二十九日発行）にも、激動の機械科学生時代―戦後―終戦―平和と題する記事の中で、戦時下での入学―勤労動員（小屋掛、軍需工場）、終戦、授業再開、悔いなき青春などとわけて記述してくれている。

七倍の競争？

昭和十九年からは、専門学校も中学校四年生終了でも受験できた。また、工学科は徴兵延期の特典もあり、さらに、機械科卒業（二カ年六カ月の繰上げ九月卒業）後、四カ月で、陸軍技術少尉（大学卒は中尉）で軍需工場の監督官になるなどのこともあり、さらにまた満州国政府の給費学生制度もあって、応募者も多く、入学試験は七倍の競争率だったと聞く。

戦後の編入もあり、最年長者は大正八年生まれ（平成七年現在七十六歳）から、最若年者は、昭和三年早生まれと八歳もの差があり、中学校五年卒業、四年修了、工業学校卒業、商業学校卒業、専門学校検定合格者、満州国からの派遣者（委託生）など多士済々である。したがって、機械科学生は寮生（出町寮）も多かった。

入学から卒業とその後

入学式は、昭和十九年四月某日、北大路烏丸にあった立命館中学校二階講堂で、中川小十郎総長の訓示を聞いた。

卒業式は、昭和二十二年三月某日、等持院北町の衣笠学舎一階の大教室であったが、末川博総長の、平和日本云々、の祝辞の冒頭に学生の一部が騒き出し、早々に中止され、各科ごとに卒業証書が手交された。

卒業後は、日本の機械関係産業もいまだ復興ならず、就職も教員、警察官、地方公務員等になった者もかなりあった。本会のメンバー各位とも現職中は、連日が多忙で、同期の者が来ることもなく、機友会総会の際等に、京都在住の若干名が顔を合わせる程度であった。

同期生の集まり方

昭和六十一年六月二十九日（日）午後、京都ホテル（旧）三階松の間で、同期の島田泰男君を発起人幹代にして「藤谷景三先生御退職記念パーティー」が開催された際、六名の同期生が参加していて、誰ということなく「同期の集まりをやろう」ということになった。

それ以降、現在に至る経緯の大略を以下にご紹介させて頂きます。

卒業四十年の集い

（昭和六十二年五月二十三日）

来賓一名、学友十九名、世話役一名、計二十二名

ひよこさんを偲ぶ昼食会

（平成元年九月十日）

来賓一名、学友十三名、世話役一名、計十六名

二十二機会親睦会

（平成二年十月十三日）

来賓一名、学友二十一名、世話役一名、計二十三名

入学五十年記念の集い

（平成六年五月十五日）

来賓四名、学友十五名、世話役一名、計二十名

義援金拠出と雅楽見舞い

（平成七年二月～四月）

拠出二十二名、四七五千円、沼田君を自宅へ見舞い、贈呈

幻の寮歌（二十二機会寮歌）

本紙編集事務局

このたび立命館大学機友会の会誌「機友会ニュース」を創刊するにあたり、企画事業部会（部会長・大金豊副会長）を中心に諸先輩と編集にあたりました。多くの会員諸氏に各種の執筆をお願いしたところ、ご多忙の中、それぞれ力作をお寄せ頂きましたこと、深く感謝致しております。このような恵贈の記事は通常、編集後記としてご報告するのが自然でありますが、実は前掲の「二十二機会」小井実氏に執筆依頼を申し上げ、原稿をご準備頂く過程で一つの興味深い出来事あるいは発見がありましたので、ここに紹介させて頂きます。

それは、小井氏の文章中にも触れられているように、「二十二機会」の会員各位の学生時代は日本も立命館大学も激動期にあり、波瀾万丈の日々が続いていたようであります。その頃、学生寮は学生生活の大きな拠点でもあり、寮生活を通して人間形成や各種研鑽が行われていたと伺います。このような学生寮にとって、寮歌は特に大きな意味があり、連帯感や情熱の発露の手段として、日常的にそれぞれの寮に固有の「寮歌」が歌われたようであります。

しかし、歳月とともに寮歌に対する思いは変化を重ね、最近では特別な儀式でもない限り寮歌が歌われることは

なくなりました。とりわけ理工学部に縁の深い「衣笠寮々歌」については、おそらくすでに印刷された歌詞はなく、これを実際に歌える卒業生については皆無に近いと思われます。このような趨勢の中で、「二十二機会」メンバーの小橋晋氏は「衣笠寮々歌」をよくご記憶で、今でも口遊むことができるそうであります。学生寮はすでに廃止されて久しく、印刷された衣笠寮々歌は保存されているかどうか定かでありませんので、ここに小橋氏のご記憶による「衣笠寮々歌」を掲載させて頂きます。

なお、楽譜がありませんので、できれば小橋氏に歌って頂きながら採譜して、是非とも楽譜の形で残したいとのご意見も出されています。どなたか、音感豊かな方にこの方面のご支援を願ったく、我こそはという御仁からのご連絡をお待ち致しております。

衣笠寮々歌

一、御幸の桜爛漫と
　京洛の人憧る
　春日再び回り来て
　衣笠山の老松に
　紫雲の雲がたなびけば
　興亜の覚悟いや高し

二、紫匂小金明の
　双ケ丘の空高く
　星座静かにまたたけば
　朝霧遠の若人が
　希望の歌をうそぶきて
　導く亜細亜を偲ぶかな

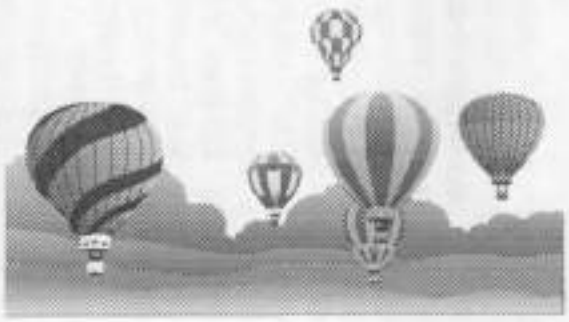
三、秋暮れのもやあいあいと
　興亜の寮はたそがれて
　興亡歴史や夢の跡
　仁和の寺の塔高く
　越路の雁の一群に
　はるか故山を偲ぶかな

四、愛宕おろしの肌寒く
　金閣寺に夜はふけて
　殺生刹めに降りしきり
　衣笠寮は涙として
　理火おこす学人の
　真理探究の剣水る

私の立命時代

明石　一

私が立命館大学にお世話になったのは一九五五年四月から一九六一年三月間での六年間であります。この前の年までわたしはいわゆるフルブライト交換留学生としてアメリカのブラウン大学大学院の応用数学科に一年間いました。当時立命館大学理工学部に在籍していた知人に勧められ、講師として講義を始めました。それまで京大の教養部で応用数学の講義をしたことはありましたが、工学部での講義は初めてでしたので最初は緊張していたことを覚えております。私の専門である自動制御の分野も、当時はまだ科目がなく振動工学、流体力学および外書講読の講義を受け持ちました。学生諸君は非常に熱心で、数学的な点について、よく質問されたものです。外書講読は面白そうな英語の技術文献を選んで、学生諸君が楽しみながら外国の文献を読む力をつけるというものですが、効果があったようです。研究の面では幸いに恵まれた環境で、ある程度の成果が得られたと思いますが、これは連良く、現在大阪教育大学教授の寺石修先生に研究助手として来ていただき、超音波誘電による鋼材の疲労に関連する研究を受け持って頂いたことによります。



衣笠の校舎の研究室は当時はまだ木造で、その二階に、今は亡くなられた杉本教授と同じ部屋で過ごしました。松ヶ崎の方にある自宅からここに通うのに、バスなどは不便な為、私はいわゆる自動二輪車（350cc）を使っていましたが、後で聞くと、これは学生諸君の注目を浴びていたようです。当時私は京大の制御研究室にも行っていたので、便利な交通手段が欲しかったわけです。今と比べると質素な研究室でしたが、実験に使える研究費などは割合に潤沢で、おかげで実験は大体希望通りに行うことが出来ました。大学自体、出来てそう間もない頃ですから、将来の発展に対する強い意欲が感じられ、張り合いのある生活が送れたと思っています。既に教授に任命されていたのに六一年四月に招かれて同志社大学に移った理由は、大学院があって研究に有利だろうということだったのですが、ほんの十二年したら立命にも大学院が出来、あまり意味はなかったのかもしれません。何れにしてもその後京大に移籍し、定年は京大で迎えました。

あの頃は日本全体が発展途上の状態で大学も同じだったと思います。何かと不自由なことはあっても活気が見られました。その後もどんどん発展を続け、現在のように立派になったことはご同慶の至りです。この近代的なキャンパスを土台として、一層研究教育に成果が上がることを願ってやみません。

衣笠は青春の思い出

薬谷　駿（昭和二十六年卒）

敗戦の惨めさを体験し、戦後の復興がこれからという時代に巡り合わせた仲間が衣笠校舎に集い、暗中模索の中で産業の機械化こそ基幹と考え、機械工学に勉学の志を立て頑張った古き青春の思い出は、同期の者の心の奥深く潜んでいたことと思います。

かむしゃらに働き歳月は流れ、日本経済の成長に寄与して来た誇りと満足感もあって人生の足跡を顧みる年代に到達したのでしょうか、誰とはなく青春の郷愁が同窓会となり昭和五十二年、京都四条通りの大江戸本店にて第一回を開催することになりました。恩師の薬谷景二先生をお招きして、再会の喜びと幸せに歓声を上げ衣笠校舎の懐かしき思い出に花が咲き、お互いの旧交を暖めることが出来ました。その勢いで今後の運営も協議し常任幹事と次回開催時期も決まり、有意義な同窓会だったことを記憶しています。

常任幹事の記録によれば第二回は昭和五十三年九月十五日厳島懐旧「古知谷」で一泊し、豪勢にも和やかな懇親の中にて、会の名称を「衣笠会」と命名し薬谷景二先生に命名して戴きました。その後も薬谷先生の存命中は毎年心待かれる同期の集いを進めて参りました。

恩師薬谷景二先生の没後二年程は中断しておりましたが、平成二年九月には酒井達雄先生を通じて、二十六年卒の衣笠会に大南綜長先生をお招きする事ができ、又、京都に帰ってこられた関達雄先生もお招きでき、衣笠会を盛り立てて頂きました。綜長大南先生からは理工学部の私学での位置づけは東の慶應に対し、西の立命館といわれる社会的水準に在ることや、研究施設の拡充には総合理工学研究機構をもった新キャンパスを滋賀の草津に開設させたい構想など次元の高い貴重なお話を拝聴し、卒業生の一人として頼もしくまた、詩りを感じた次第です。

衣笠会も回を重ねるにつれ、恩師薬谷景二イズムを継承すべく教授酒井達雄先生にお願いして、第十一回はびわこ・くさつキャンパスに集合し、素晴らしい研究施設の見学や古代の製鉄コンビナートに開学された理工学部の奇縁について酒井先生から講演を拝聴し、母校立命館大学の将来に憧れた遠大なる企画と優秀なる人材が、世界に羽ばたく日の近いことを身近に感じ、衣笠会にとっては大変有意義な勉強の一日でした。

私達の同窓会は年と共に老いることなく、卒業生として衣笠相性を持って永遠の青春を語り継ぎ、いつまでも若々しく在りたいと念願するものです。今日まで会の運営が着実に実施できたことは京都西陣にお住まいの常任幹事奥村幸雄さんのお人柄と情熱の賜物であることを付記させて頂きます。

「激動の機械科学生時代と恩師、先輩から得た教訓」

山田元助（昭和二十二年卒）

平成六年三月一十六日、立命館大学びわこ・くさつキャンパス（BKC）で開学記念式典が挙行された。当日は快晴、まさにBKCの新しい門出にふさわしい日であった。

午前十時三十分から式典があり、正午から祝賀会があった。祝賀会では、琵琶、狂言、民謡と多彩な催しがあり、私も出席者の一員として理工学部の発展を慶祝したが、五十年前の衣笠在学当時を偲び、全く感無量であった。

一、激動の三年間（戦時―終戦―平和）

私が立命館専門学校工学科機械科に在学したのは、昭和十九年四月～昭和二十二年三月の三年間で我国歴史上でも誠に重要な激動の時期であった。正に非常時で文科系の学生は学徒動員で戦場へ、理科系の学生は徴兵猶予で勉学を続行できたが国の理工系に対する要求は厳しく、苦悩な勉学が許されず憲兵が学園を出入りする緊迫した状勢下であった。

入学当時の工学科は校舎こそ木造であったが、老松が幽邃な池に美しい影をうつし、緑の美しい学園で、広大な敷地には校舎や実習工場、特色のある日本刀鍛練所、馬場等が点在し、衣笠の緑につつまれた美しい「キャンパス」であった。

機械科、電気科、化学工学科、土木科、探鉱冶金科の五科を包含する工学科の部長は、元京大工学部長の本野亨先生であり、機械科の先生も誠に多士済々であった。

機械設計、熱力学は機械科専任教授の日下部先生（以下敬称略）蒸気機関及び原動機（首藤）、精密機械・精密測定（佐々木）、流体力学（藤本）、機械工作法（桑川）、内燃機関・機構学（小林）、材料力学（西原）、紡織機械（藤野）、精密測定・流体力学（沢村）、工作機械（桜井）、数学（曽我部）、国学（池田）、英語（増野）、独語（雪山）等々であり中国語の時間もあった。当時、新進気鋭の若い藤谷豊三先生には製図を教えて頂いた。

戦局の進展と共に軍事教練もますます厳しく、不足になった労働力供給源として動労動員が強化され、農村（島根県三瓶山麓の小屋原村）へ、又飛行場（明野）の建設、更に軍需工場（三菱重工業・柱）へ動員され、理工系といえども、勉学どころではなくなった。

昭和二十年八月、昭和天皇の終戦の詔勅の「ラジオ」放送があり、終戦、我が学園は戦時色を強めていたため、創立以来未曾有の苦境に立った。私達は工場を引きあげ、ひどい食糧難で一時故郷に帰るものが多かった。

その後、学生は徐々に学校へ復帰し、大学では末川博先生が多大の期待をもって迎えられ、学園の民主化と近代化が進められた。

授業面では、学期末試験の再開時期に、今後の学園民主化とがからんで、工学科の「スト」が提唱され討論した。結局、試験を実施し今後の活動を通して工学科の新体制をたてることで事態が収拾された。私は機械科二年の総代をしていたので、各科の総代と共に旗を振った一員であったが、日下部先生から私の下宿へ深刻な事態を憂慮する手紙が届けられたりした。その時、旗を振るよりも、「スト」の収拾の方が難しい事を経験した。

学校も徐々に落ち着き、学園の基礎が築かれる事になったが、戦後の急激な「インフレーション」食料物資不足の学生生活は、決して楽なものでなかったが、平和の有り難さが痛感される日々であった。そして、戦時下で住方がなかったものの三年間の逆境を動員で過ごし、私自身の基礎学力の不足を痛感した。現在の学生諸君は温厚の恵まれた環境をうらやましいと思う。

二、在学中に得た二つの教訓

（一）「人事を尽くして天命を待つ」

終戦後の混乱もやや落ち着いた昭和二十一年の初夏、私は、はからずも工学科部長の本野先生から、「人事を尽くして天命を待つ」と書かれた色紙を頂いた。（写真参照）

本野先生は、戦時―終戦―平和への激動の難しい時期をご苦労を重ねられて切り抜けられ、理工学部の発展の今日の基礎を築かれた方である。先生は幾多の困難を、この座右の銘をもって突破されたのであろう。この銘は、強い励ましの中に、詩戦もさまされており、人事をつくした人に安らぎを与える面があり、誠に含蓄の深いものを感じる。

私は本野先生のご厚情に感激し、この色紙を大切に爾後五十年間居間に掲げ、困った時にはこの色紙を見ては自省し、先生の在りし日の温容を偲んでいる。

（二）自力信用

戦時中の昭和十九年の或る日、工学科の学生全員が校庭に集められ、旧満州で活躍されている先輩の講演を聴く機会があった。

その先輩の話の中で特に印象深かったのは、「中国に自力信用と言う言葉があります。人を信用する時は、すべて自分の責任で信用し、たとえ自分が信用した人に裏切られる事があっても、その人が悪いのでなく、その人を信用した自分が誤っていたのであって、責任を相手に転化しないと言う事であります。」と言うお話であった。私はこの話で「人を信用する」ことの本当の意味を知ると共に、その考え方に深く感銘をうけた。

私はその夜、中国系の人々と接する事があり、時には信用していた人に不測の事態をうける懸念がある事もあったが、相手が逆境の時でも自力信用の態度をとり続けた所、よく当方の信頼に応えて頂けた、すべて解決出来た事があった。

三、素晴らしい技術者

風雲急を告げる昭和十九年暮頃、私達機械科同期生の殆ど（一部は京大へ）が神武第八製作所（三菱重工業・柱）に勤労動員された。

海軍航空監督官の下、三菱重工社員、徴用工員、勤労学徒が広大な工場で二四時間体制で何万人かの人が働いていた。

所長は李家孝氏（後に三菱重工社長、会長）、監督官は小川海軍大佐だった。

我々機械科同期生の職場は、「クランク、シャフト」の生産で、「エンジン」の心臓部である事から高精度の仕上げが要求された。

所属工場の工場長は藤井工場長、現場の指導者は平塚工師（工師とは学卒技師に相当する現場出身者の職名）であった。海軍の将校も絶えず現場をまわり、士気と生産の向上に努めていた。

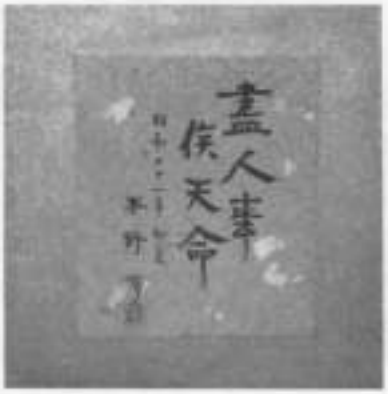
我々は、「大豆かす」の飯や顔が写る雑炊を食べながらよく働いた。職場で直接指導をうけた平塚工師は、厳しい技術者である一方、「クランク」の神様と現場の人々に尊敬されていた。

一般工員時代、「これは平塚が造ったものである」と言えば検査は検査をしなかったと伝説のある人であった。私はここまでになられた平塚工師の技術や仕事に対する情熱、厳しさや努力に心を打たれた。（後年同氏は、国から褒賞を受けられたとの事である。）

その時は知る由もなかったが、あと一週間で終戦という昭和二十年八月八日、大詔奉戴日、我々機械科同期生（現二十二機会）は全員が工場の「グラウンド」で整列する中で、海軍航空監督官小川海軍大佐と李家所長から栄えある団体表彰をうけた。多数の動員学校、大学の中から、他の一校（旧制第三高等学校と旧制京都第一工業学校）と共に選ばれたのである。

別に動員学徒十名の個人表彰があり、私も含まれていたが、式後、あの厳しい平塚工師が破顔一笑私の肩をたたいて下さった事を思い出す。

戦争末期、米国の大型爆撃機B29が神武第八製作所の上空を堂々と編隊を組んで飛来し空襲警報発令で、我々は避難命令のまま、工場外の防空壕に避難したが、監督官、所長以下工場幹部が工場の職場にふみとどまっていた事を知っている。正に戦争だった。



幸い爆弾が投下されぬままに終戦になったが何時爆撃されても、不思議でない状況だった。私は産業人のその姿に深く感銘した。我々動員学徒の中で機友の田淵哲夫君が所用で広島に帰郷した所折あしく、広島の原爆にあい亡くなられた痛恨の出来事もあった。

ー茫々として時は流れるー

話は同学会喜寿祝賀会に戻る。

祝賀会場は喜びと活気にみちていた。当日、来賓の京都大学井村裕夫総長のスピーチが始まってる。

「本日、この会場へまいりますとBKCと言う文学が生る所で並んでいて、私は新しい「テレビ」局が生まれたのかと思いました。」と述べられ、会場は大爆笑でわいた。

四、まとめ

私は大正ロマンの末期に生まれ、激動の昭和を生き抜き、この平成の代に「実りの人生」を迎えている。

その人生の中でも、もっとも感動にみちち、集約された期間は、戦時ー終戦ー平和へと私が過ごした機械科時代の三年間であるかも知れぬ。又、二度と戦争があってはならない。平和の尊さを伝えたいと痛感した。

この三年間に、私は良き恩師、先輩を知った。尊敬すべき技術者、平塚工師にも親しくご指導を頂いた。又素晴らしい学友、二、機会の連中と苦しい時期を共にし、固い団結が生まれた。五十年たった今も、結束は固い。私は、機友会の発展に一生を尽くされた藤谷健二先生と共に、このBKCへの発展の喜びを共に味わいたかった。

『事未だ成らず、小心翼々』『事正に成らんとす、大胆不敵』『事既に成る、油断大敵』。我々は今、『油断大敵』の時を迎えているのかも知れない。

（平成七年十月一日記）

心の内の一つの機友

大金　晋（昭和三十二年卒）

昭和二十七年四月、機械科新入生のガイダンスの日であった。教室に入ると、見覚えのある顔が二人いるではないか。一人は、京二中から山城高校へと一緒に学んだ岡本壮一君、もう一人は、京二中から新制度の学区変更で鴨析朱雀高校へ行った片岡博君であった。

片岡君には格別の思い出があった。父の職業の関係で、群馬県の桐生に生まれ、福井、京都、栃木への疎開、京都と転々とした私にとって、戦争という事情もあり、祭りなど全く無縁であったが、二年の時（昭和二十二年）「祇園祭を知らんのか」と問ノ町の自宅に招待してくれた友であった。

ガイダンス終了後、三人で話しこんでいると何時の間にか人集りがして「仲間に入れろ」ということになり、洛星中学の東（紅梅町）の岡本君の家に集合した時には十一名にもなっていた。その時の記憶は定かではないが、大阪組の今出・神野、大津組の正田（荒堀）・桃和田・大西らの諸君ではなかったろうか？何れにしても、その後の三十一年卒機友のコアーの一つとなったのである。

しかし、その頃の私は音楽にかぶれていて、ギターとアンプを手に進駐軍のキャンプやキャバレー、舞台やレコード歌手との触れりなど華やかな世界（自分ではそう思っていた）を飛び廻って、その結果は二回生の終わりで八単位しかとれていない有様であった。

そんな中を片岡君は、時々学校の行き帰りに等持院南町にあった家に来てくれて、友の話や、また学校に出るよう誘ってくれた。

当時の私は、夜を中心とした生活とハヤリもので不健康そのものであり、たまに学校に行くと（やっと来たか）とか「早く学校だけにしろ」と皆から厳しく諭められていた。

そんな或る日、片岡君が家にやってきて、「桜井先生が君のことを心配して聞いておられた。今日一緒に行って挨拶したほうがよい」と真剣に話すので、学校に行き先生にお会いしたところ「元気にしているか？頑張れよ」とおやじのような一声を掛けてくださった。また、横に居た人が「君が大金君か」と声を掛けてくれ、これが藤谷先生との出逢いであった。

このような出来事と、当時はやり出したマンボ（ラテン）がジャズとの区別もつかなくなりだした音の世界への疑問もあって、今迄の生活と決別し、私を心配してくださっている諸先生や友に応える努力をすべく、学生生活一筋に戻る決意を固めたのであった。

当時は、一・二部授業の受講も一回から三回生への単位取得制度もなく、昼夜を通しての受講に挑戦した。

このような中で当時春秋の二回行われていた機友会の行事に、椎本チェーン、日豊製鋼などの工場見学会があり、町工場しか知らなかった私にとって、生産現場の流れと仕組みは大きなインパクトを受けるものであり、これが設計・生産技術・生産管理・工場経営と進んでいった一つの基になったのかもしれない。また、行き帰りのバスの中でも諸先生方や先輩・後輩との交流の場もあって、私の機友の輪はどんどん広がっていった。

こうして学生時代を思い出すと、色んな場面が浮かんでくる。

・夏の或る夜、南郷洗堰下流にあった正田君の家で製図をやると集まって、瀬田川対岸のアベックを望遠鏡で夜遅くまで覗いていた青春（性春）のこと。

・自家用車など一台もない時代に、プリムスの外車に乗ってくるやつ（岡本一良君）がおり、その後、そのプリムスと自動車部の箱型クラシックカー二台の計三台で、岸和田の先の二色ノ浜へ泳ぎに行ったが、砂地に車輪を取られ、乗っていた皆で（八・九人は乗っていた）必死に脱出したはいいが、泳ぐ間もなく汗を流すだけで帰ってきたこと。

・杉本先生の外書講読の前日は私の家に集まって、おやじの講義でノートをとり、当時は周辺の友に廻してついに先生から「訳本は行き渡ったようだな」といわれたこと。

さて、単位の修得も着々と進み、卒研は恩師大に移られた桜井先生の最後のゼミ生として「軌鋼の振れ破壊強度について」であったが、恩ある大先生の前での最終講問では、あがってしまって何を聞かれたのかも思い出せなく「終わった！」の感あるのみであった。

しかし、世の中は思い通りにいくものでなく、工場実習Ⅰ・Ⅱは同一年度に取れなく、工場実習Ⅱの必修を残して五回生に進むのであった。

それからは、必修の修得と一般教養の可の取り直し、藤谷先生から「卒研の続きをやれ」とのご指示もあって、ゴールを目指すのであったが、その間にも新たな機友との出逢いが数多くあった。

・笠井先生のお声掛かりで機械科軟式野球チーム「アキレタボーイズ」を編成、第三回理工学部対抗野球大会で優勝、山城の後輩で甲子園にもでた内藤君や吉田君など、今写真を手に懐かしく、また私自身生まれて初めてで最後の右中間ホームランを打ったのを思い出す。

なお、笠井先生には現在に至っても公私共に心の寄り所として大変お世話になっている次第である。

・また、この学年は暇さえあれば麻雀で、亀安寺の下宿に上杉、渋谷、合原君たちと集まって、時には杉本先生の家にも押し掛けたものであった。

卒業後二年の三十五年の春、勤め先を変わって京都に戻った私は、会社人間の路も進むのであったが、機友会は総会の参加の一メンバーにしかすぎず、活動は年度幹事まかせであった。

しかしその間、悩み事や相談事に心からアドバイスしてくれたのは、諸先生や機友諸氏しかなかったことをしみじみ感じている。

その後、或る懇親会で、藤谷先生・笠井先生・甘岡君から「会の締め括りを盛り上げるのに校歌をやれ」とも指示があり、日二味線での前奏の校歌斉唱が始まり、これを期に年度幹事、第二部司会（宴会部長）、副会長へと進むのであった。

今、七〇〇〇人余の機友と、全国十三ブロックの支部編成、機関誌「機友会ニュース」の発刊など、機友会は大きく発展的展望を遂げつつある。

さらに理工学部は広大なびわこ・くさつキャンパスに拡充移転し、時代を先取りした学科の編成・新設、産学交流をきめた諸研究設備の建設と、二十一世紀に向けての大プロジェクトを着実に実現し、大きく羽搏いている。

しかし、今の機友会をこれまでに築いてこられた藤谷先生、また幹事として長年まとめあげてきた親友甘岡君も今はもういない、せめてこのキャンパスと支部組織を持つまでになった機友会の姿を見て頂きたかった思いに駆られるのは、私だけであろうか。

このような貴重な文の寄稿をするのには、私にとっての機友への特別の思い入れがあるからではありますが、機友の諸君にとっても青春時代の一ページを飾る大小の思い出や、技術革新の激しい社会生活での苦労話も数多くあることと存じます。創刊を迎えた「機友会ニュース」の次号では、皆さんの数多くのお便り、ご寄稿を是非お願い申し上げます。

おわりに、新キャンパスでの盛大な第十五回懇会と機友会ニュースの発刊をお祝いしますとともに、材料研究室（桜井研）の先輩でもある大南稔長率いる立命館大学のさらなる発展を心から祈念してやみません。

BKC建設に懐う

竹上信次（昭和十九年卒）

理工学部といえば、我々の年代の者にとっては、やがて戦場へ赴くべき入生の最后と感じて、残る青春を機械科の学生生活に没入させてくれた衣笠山麓を忘れることは出来ない。その等持院キャンパスに、理工学部が別れを告げた日に、私は、新しい「BKC」の全容を初めて見学した。

その昔、北大路の中学校舎の一部で発足した工科学校を、この眼で見てきた私には、ここBKCの新天地は余りにも広壮で、これが半世紀あまりの間に成し遂げられた理工学部躍進の姿なのだ・・・と、自らを納得させつつ、無量の感に打たれたものだった。

二十一世紀の人類社会の担い手を育成し、教育と研究を担う学園への飛躍充実をめざして・・・と謳われたこの学園再編成こそは、学園の今後の命運をかけた大事業であり、次の世紀への道を拓くものとなろう。

学園史を繰る迄もなく、京都御所の傍らに、ささやかに開校した立命館が、広小路キャンパスから、中学校を分離移転させたが、この北大路キャンパスに於いて中学校の多様化と充実が中等部のみならず、戦時の非常事態も含めて旧制大学の発展を支えた。

その戦時中にあって、当時の立命館としては破格の規模をもつ等持院キャンパスを得て工学科が建設されたことが、戦後の学園教学復興に活路を開く拠点を確保していたことになり、衣笠拠点による教学の現代化、総合化が実現した。等持院キャンパスなしには考えられない大改革であった。（当時、他の大学は、新しい現代の課題に適応した大学に再編するためには、分散移転せざるを得ない状況に追いこまれていたという）

こうして見ると、何れの場合にあっても、新しいキャンパスがその次の時代への学園の前身と飛躍を可能にし、一方、その地域の発展にも貢献してきた。

そんな懐いで見ると、このBKCは、今でこそ大き過ぎる程の余地を持っている様に見るが、そのことが、やがて二十一世紀に望まれる多様な諸課題の解決に何よりも有利な条件と展望を与えてくれ、その実現を保障してくれるに違いない。

BKCの屋上から見はるかす眺望は秀逸である。そして、校歌にも唱われる比叡が見える。その姿は等持院の学友たちの仰ぐ比叡の反対側の姿であるとはいえ、比叡の望める地であることにも深い思いを抱いた。ここでも必ずや、よき立命館の伝統を生かし、理工学部の新たな躍進の足跡を刻んでくれることを象徴していると思えた。

私は幼少時より、出町寮に隣接した立命館の役宅に育ち、北大路・衣笠・広小路の何れのキャンパスに於いても教育を受けたが、流石にこの年齢になれば、BKCには足を向けることは滅多にないことだと思うが、ふと、この大事業の先頭に立って居られる大南稔長先生こそは、我等の機友会の後輩で居られることを想い、急に身近に感じるのが不思議だ。更に理工学部長があの得丸英修教授だと承って、夢かとばかり懐かしさがこみ上げてきた。得丸さんは、昔、私が旧大工学部応用物理学教室助手を勤めていた頃から、東木研究室での顔馴染みで、私が助手を辞任させてもらった時は最終回生で居られ、私と入れかわるように大学研究室に残られた方だっただけに、早速揃って古い写真をひき出すと、何と私と並んで撮っているものもあった。以来四十年振りにお会いできたが、今、この大事業に奮闘して頂くのが、あの「得丸さん」こと得丸博士だということは、私にとっては単なる偶然には思えないのだ。こんな大事業でご苦労の極みではあろうけれど、得丸先生はあのときから、そういう運命の方だと思えて仕方がない。両先生のご奮闘とともにご健勝をお祈りしてやまない。

かくして、BKCは、また私にとっても近い存在となりつつある。この広いキャンパスを如何に有効に利用するかは、考えただけでも夢踊るものがある。然し、私は、ここしばらくは世界的、否、宇宙的視野でじっくりと考えた方がいいと思う。大体立命館は狭い所を隅々迄利用するのは優れているが、本当は、充分に広い空間が必要なのだし、ゆったりと百年の大計に英知を結集して取り組んだ方が良いにきまっている。それには、校友がお互いにBKCの動向を知り、交流を絶やさぬことが大切だろう。こんな時に、機友会ニュースの発刊が企画されたことに心から敬意を表したい。

会員だより

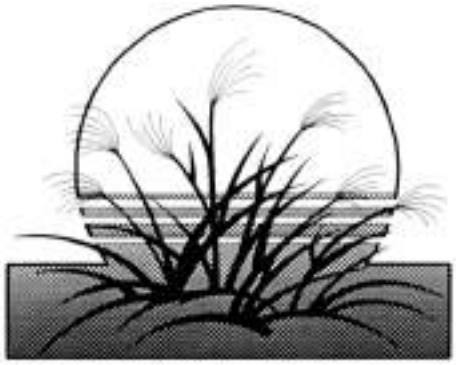
今再び子供と熱く燃えて

オムロン株式会社　今中弘一（昭和五十五年卒）

「今年の猛暑は格別だったな」と思っていたところ、「自分がためた、こずかいをたすので買い物に付き合ってほしい。」と言い出しました。そこまで言うのならということで、店先に足を運び、子供の予算で買える望遠鏡を手に入れたのです。早速、買ったばかりの望遠鏡を子供と一緒に組み立てて光軸を合わせ遠くの景色等を暫間から眺め、まず月を見ようということで夜を楽しみに待つ事にしました。

「天体観測は月に始まり月におわる」っていたら、あっと言う間にもう紅葉の季節を迎え、過ぎたこの夏が懐かしく思えてくる今日この頃です。

みなさんもいろんな出来事がこの夏から秋にかけてあったのではないでしょうか。私にとっても大変興味深い出来事がありました。この八月のことですが、小学校四年の息子が急に「望遠鏡が欲しい！」と言い出しまして、また何でも欲しがる癖が始まったなと思



「と言われているほど、我々にとって月は親しみのある存在なのです。私が息子と同じように小学生の頃、学習雑誌の付録に付いていた望遠鏡のレンズを画用紙で作った筒に貼り合わせて望遠鏡を作り、初めて眺めたのも月であったと遠い昔を思い出しました。月のクレータがはっきり見えたときの感動は大変な驚きであり子供心にも凄く嬉しかったことを今でもはっきりと覚えております。そんな幼い頃の私と息子の様子を夕づらせながら望遠鏡をのぞいたのです。望遠鏡の視野の中には二十年前と同じ姿がありました。

もちろん今年の夏休みの息子の自由研究は宇宙がテーマとなったことは言うまでもありません。昨年のテーマの亀の観察では、親子で最後まで苦労しましたが、今年は打って変わり、自分から図書館の宇宙関連の本を十冊も借りて読みだし、あるいは書店から天文雑誌を買ってくるなどして自分から進んで面白そうに模造紙の上に書き上げあっというまに仕上げてしまったのです。出来上がってから見てみたんですが私の知らないことがたくさん書いてあり、小学生の自由研究では少し難しすぎるかなと思うくらいの内容でした。

お盆様で我が家の天文ブームはこの夏だけに終わらず、もっと大きくてしっかりした、しかもモータドライブ方式の二十センチの反射式がいいとか、どこそこの天文台には何センチのがあって見せてもらえるとか、また信州のあるペンションでは大体観測用の設備が揃っていて自由に使ってもいいとか、様々な情報をあらゆるところから仕入れてきて自慢げに説明してくれるわけです。

そんな子供の影響もあり先日、滋賀県の多賀町にあるダイニックアストロパークという民間の天文台を訪れ太陽の表面から吹き出ているプロミネンスという炎の様子や肉眼ではまったく見えない星間の金星が月のように三日月状に見える様子を観察してきました。さらに大津市にこの春オープンしたばかりの生涯学習センタで開催されている天文展示のつどいにも親子で参加してきました。その夜は雲一つない晴れた秋空で大津天文同好会の方の了ドバイスで立派な望遠鏡を実際に使って星を観測するというイベントでした。望遠鏡のなかにみえたのはなんとリング付きの土星だったのです。今まで本の中では見たことがあったのですが自分の目で見るのは生まれて初めての出来事でした。何と表現したら良いのかわからないような素晴らしい感動を覚えたのです。

初めは子供に合わせる所から始まった宇宙の話題に夢も、しっかりはまってしまったというわけです。今では子供と一緒に天文雑誌を読みながら宇宙について話しあう機会が増えるようになりました。ついこの前までは「ファミコン、ファミコン」と言ってたのがまるで嘘のようにまったく興味が変わってしまいました。まあこの宇宙に対する興味と関心がいつまで続くかわかりませんが、見守っていきたいと思います。

ここで息子と一緒に勉強した宇宙についての質問をみなさんに喚つかしてみたいと思います。「光が一秒間に進む距離は地球を七周半、つまり三十万キロメートル。それでは太陽の光が地球に届くのに必要な時間はどのくらいでしょうか?」「地球と太陽の間の距離は一億五千万キロメートルあります。二つ目の質問は、「太陽の年齢と寿命はそれぞれ何年でしょうか?」「太陽はこの銀河系に生まれて四十六億年経ちます。そして寿命は百億年といわれております。人間でいえば百歳まで寿命があるとして四十六歳と言うことになります。」

この二つの答えからあなたはどのくらい多くの質問や興味が新たにわいたことでしょう。このように宇宙と言う空間の中に生きている人間から見ると時間も空間も、とてもスケールの大きな話であり、また宇宙から見ると人間と言うのはとても小さな存在であると思うわけです。でもこの小さな存在である人間が宇宙のことを色々と調べ一つずつ解明してきたと言うことはとても素晴らしいことであり、人間という存在はかけがえのないものるとしみじみ思うのです。それだけにこの一瞬一瞬を大切にしていきたいと思う今日この頃です。みなさんも是非を見上げてみてはどうでしょうか?

(理学は村山九周氏)

事務局便り

卒業者名簿及び機友会ニュースの発行にあたり、御寄稿、御協力頂きました方々に心より御礼申し上げます。学部移転にともない事務局連絡先が変わりましたが、皆様方に御連絡先等の変更がありましたら本会まで御一報頂けますようお願い致します。

立命館大学機友会事務局連絡先
〒五一五―七七
滋賀県草津市野路町一九一六
立命館大学理工学部機械工学科
電　話〇七七五―六一―二六六四
FAX〇七七五―六一―二六六五